

の義なり、舊事、古事、日本紀等に、伊弉諾神の黑鬘のヒビカツラと化りしといふ事見たり、また葛讀でカツラといふも、是等は古訓にあり、見たり、日本紀に神武天皇葛網を結びて土蜘蛛を殺すは、給ひしなどいふが如き、葛の字讀でカツラといひしなり、亦讀でクズといふは、細屑の義にて、其根を粉となして、噉ふに依りて、此名ありしと見えたり、

〔新撰字鏡〕葛 加豆良

〔日本釋名〕葛 かつらはながつる也、上略なり、るとらと通ず、

〔倭訓栞〕葛 かつら 蔓をよむも鬘に同じつたかつらの類也、葛も鬘の義なり、くすかつら、ふぢかつら同じ、

〔萬葉集〕三 雜歌 登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三 諸乃神名備山爾 略 玉葛絶事無在管裳 不止將通略 下

〔冠辭考〕多 玉葛 たゆることなく

万葉卷三に 玉葛絶事無在管裳云云、こは蔓の長くはひひろぐる物なれば、たえぬとも長きともいへり、玉とは是も子ある物なればいふ、

〔和漢三才圖會〕九十六 玉蔓

按玉蔓其蔓引地葉似忍冬葉而厚、春開小花、色青綠可愛、

〔圓珠庵雜記〕もろかつらにふたつあり、新古今にみればまづいと、涙ぞもろかつらいかにちぎりてかけはなれけむ、これは祭の日、桂にあふひをかけたるをいへり、後撰に、あしびきの山

におふてふもろかつらもろともにこそいらまほしけれ、六帖に、神つ代のいがきにはへるもろかつらこなたかなたにかけてこそ見れ、これらははひあへる葛をいへるなるべし、

〔眞淵〕云はひあへる故にもろかつらといふともきこえず、さる名のかづらひとつあるにや、

〔宜禁本草〕五 乾葛粉 甘大寒 飢年以代糧

葛利用